

地球上で生きていくための教育

～「生きる力」より「生きるための力」を～

Education for existence on the earth: “zest for living” or “ability for existence”

小井土 由 光*

Yoshimitsu Koido*

要 旨

家庭, 地域社会, 学校, いずれの教育の場からも「人間が生きていくために何をしておかなければならないか」という発想がなくなりつつあり, そうした共通認識をもった文化が崩れかかっている. それらは危険回避能力あるいは総合的判断力の欠如となって表われている. 人間が地球上で生きていくことは生命維持の基本であり, そのための教育が必要不可欠となる. 具体的には, 人間の活動を地球の運動リズムのなかで位置付け, 教える側にも教えられる側にも自分の問題として問われるような災害教育が求められる.

キーワード: 生きていくための力, 災害教育, 地球, 学習指導要領

Key words: ability for existence, education for natural disasters, the earth, course of study

はじめに

学校教育に関する基本的な考え方がここ10年ほどの間に大きく変わり, 教師が一方的に指導する教育をやめて, 子どもの興味・関心を大切にすることが重視されるようになった. 現場の実態はともかくとして, “子どもが自ら学ぶまで待つ”という『新学力観』なる考え方が導入され, その延長線上で1998年に学習指導要領が改訂された. そこで登場させた『生きる力』という言葉のもとで, 新しい教育課程が小・中学校で2002年度から実施されている.

学習指導要領では『生きる力』を“自ら学び考える力”であると説明している. しかし, この言葉には業界用語的な雰囲気がある. よほど事情に精通した者でないとその意味をすぐに理解できるわけではない. それよりももっと直接的に『生きていくための力』を考えなければならぬ深刻な現実があると思われる. すなわち, 人間が地球上で生命を失わずに生きていくた

めの教育を真剣に考えなければならない事態が進行している.

『生きていくための力』と教育の現状

自然科学の立場から考えると, 『生きていくための力』として最も基本的なものは, 間違いなく“死なないための力”である. 宗教的にはいろいろな考え方があるが, 人間一人は生物学的な死をもって終了する. そのため, すべての人間は意識しようとしまいと生命を維持し続ける努力を重ねている. その中には本能に属する部分もあるが, かなりの部分は学習により獲得されたものを通じて行っている. こうした生命維持能力のほかに, 人間には社会生活をすることで生きていくことも求められ, そのための能力も基本的に重要となる.

どちらの能力にしても, それらの内容がどこかに明確に規定されているわけではない. おそらく暗黙の了解のようにしてそれらを身につけ

* 岐阜大学教育学部地学研究室
Faculty of Education, Gifu University

る教育がなされてきたのであろう。しかし、家庭・地域社会においても、学校においても、それらはかなりあやしい方向に歩き始めており、結果として『生きていくための力』が極端に落ちてきているようである。

1. 子どものペット化

家庭や地域社会では、いろいろと多岐にわたる内容を生活習慣の中にちりばめながら『生きていくための力』を教育してきたことになる。自然現象への対応も、言い伝えなどを含めて個々の家庭や地域社会の状況に即した教育を通じてなされていた。それらの中には非科学的な内容も含まれているが、いざという時にそれらが自らの生命を守る有効な判断を生み、生活の場を確保する手段となり、家庭や地域社会の有機的な連携をもたらすことにつながっていた。おそらく生命維持能力と社会生活能力を同時に教育するシステムであったのであろう。

ところが、日本ではそうした教育システムが、政治・経済・社会などのいろいろと複合した要因で崩壊しかかっているとみてよい。子どもに関するすべてのことを学校と塾に依存する体質や風潮はこのあたりのことを物語っている。家庭では、悪循環のように基本的な社会生活能力を身につけていない親が多くなり、それにもかかわらず核家族化だけが加速度的に進行してきた。子どもの身体的・精神的な発達段階を無視して、生活時間や食事などを親（大人）のペースに巻き込んで平然としている生活スタイルが一般化しつつある。「子どもが生きていくためにしておかなければならない」ではなく、「今現在、自分（親）と子どもが楽しく生きていればよい」ようである。子どものペット化である。飼い主はペットに芸を仕込んで楽しむが、自分で食べ物を獲得するような訓練をしない。飼い主がいなくなると、場合によってはペットは死ぬ。殺されることもある。受験対策という芸だけを仕込まれてきたペットは、基本的な『生きていくための力』を20歳前後になってからようやく身につけていこうとしている。

2. ハンバーグ教育

学校教育では、『生きていくための力』はおもに各教科の学習を通じて身につけることになる。その中でも義務教育における各教科の内容は、それを理解するための予備知識的な役割も含めて、基本的なものになっているはずである。いわゆる“読み、書き、算盤”といわれるような内容は必要最低限の能力にあたると理解される。例えば、小学校で無理やり覚えさせられる算数の九九は社会生活の中で必要不可欠の能力であり、場合によっては瞬間的な計算力として生命維持能力の役割を果たすこともある。

しかし、現実には、「九九を覚えるのがいやなら覚えなくてもいい」式の論理が出てきたと聞く。そこには「電卓があるから無駄である」といったみかけの合理性も顔をのぞかせており、『新学力観』もこのあたりのことを正当化しそうな気配である。しかし、実際の生活では頭の中で簡単に暗算をして即断する場面のほうが圧倒的に多い。やはり生きていくためには、いやでもなんでも理屈ぬきで覚えなければならないことがある。子どもに好物のハンバーグだけを与えていけば良いわけではなく、生物体を維持するための基礎食物も食べさせなければならないし、そうした習慣を身につけさせなければならない。高校の理科で好物の科目だけを食べさせられて入学してくる大学生をみると、やはり『生きていくための力』は学校現場から縁遠いものになってきていると思わざるを得ない。学校も子どもをペット化しているのかもしれない。

3. 危険回避能力と総合的判断力

こうした教育の現状が集約されたかのように、近年、危険を察知してそれを回避する能力が日本の社会全体で極端に落ちてきているように思われる。人間はいろいろな『生きていくための力』を発揮することで、簡単には生命を落さないようにしてきた。しかし、自然現象に対しても、人為的な作用に対しても、何をしたら危険であり、危険になったらどう対処するかという判断が自分でできなくなっている。

そこに求められる能力は、かなり漠然としているが、経験、生活習慣、考え方、知識量など、おそらくその個人が持っているあらゆるものの

総決算として表われる総合的な判断力であろう。それを瞬間的に発揮しなければならない場面もじつに多い。これには家庭、地域社会、学校、おそらくすべての教育システムが深くかかわっているはずである。競争能力だけが基本的な社会生活能力であるという風潮も生命維持能力を歪めているであろうし、生活の便利化もかなりの影響を与えていよう。あらゆる場面での過保護という側面もあろう。あげればきりのない理由が複雑に関係していると思われるが、結果として、危険回避能力あるいは状況判断力の欠如となって表われている。「生きていくために何をしておかなければならないか」という発想が教育の場からなくなりつつあり、そうした発想による共通認識をもった文化が崩れかかっているともいえる。

地球の上で生きていくために

人間が恒常的に生きていける場所は現時点では地球の表面以外に存在しないから、まずはそこが安定していて生命の危険にさらされない場所でありたいと願うことは当然である。実質的に「動かざること大地の如し」と思い込んでいる人は多い。しかし、それは明らかに錯覚であ

り、大地は決して安定したものではない。大気などの大地をとりまく自然環境も含めれば、人間はかなり激しい運動体の上や中で生活しており、そこで無条件に安心して生きていくことはまったく保障されていない。『生きていくための力』として最初に掲げられなければならない具体的なテーマは、激しい運動を繰り返す地球の上で安心して生きていくために何をしなければならぬかである。

1. 地球が刻むリズムと人間の生活リズム

地球の年齢約46億年を1年にたとえると、人類は大晦日の23時59分以降の1分間にも満たない間に文明社会を築き上げたことになる(第1表)。個々の人間はその中のさらに一瞬にすぎない時間を過ごしているだけである。地球は46億年のなかでいろいろな種類の運動を起こしながら変化してきた。現在起こっている火山噴火や地震活動などのさまざまな運動は、最後の100万年足らずの期間、1年にたとえると最後の2時間足らずの時間内で繰り返されている現象である。我々が生活している平野や台地も、目にする山々の姿も、その中で形成されつつある過程の一瞬を表わしているだけに過ぎない。

1891(明治24)年に起こり、死者7273名とい

第1表 地球の年齢46億年を1年にたとえると

地球の年齢	1	年	備	考
4,600,000,000 (46億)年	—	1月 1日 0時 0分 0秒		
4,000,000,000 (40億)	—	2月 17日		
3,000,000,000 (30億)	—	5月 7日		
2,000,000,000 (20億)	—	7月 27日		
1,000,000,000 (10億)	—	10月 13日		
500,000,000 (5億)	—	11月 22日		—・生物の急増
100,000,000 (1億)	—	12月 24日		—・恐竜の繁栄
10,000,000 (1,000万)	—	3 1日 5時		—・人類の誕生
1,000,000 (100万)	—	2 2時 5分		
100,000 (10万)	—	2 3時 6分		
10,000 (1万)	—	5 4分 3 5秒		—・文明社会の誕生
1,000	—	5 9分 2 8秒		
100	—	5 7秒		
10	—	5 9秒+0.6秒		
0	—	0秒		

う多大な被害をもたらした濃尾地震はわが国最大級の直下型地震である(第2表)。濃尾地震を起こした根尾谷断層系の断層群は3000~7000年ほどの間隔で活動している(村松ほか, 2002)。100万年の1/100にあたる1万年という期間だけを考えてみても、濃尾地震級の地震は2~3回の割合でしか起こらないことになる。このように、地球の運動リズムは人間の生活リズムとあまりにも違いすぎるから、人間は地球の息づかいを日常的に気にすることなく過ごしているだけのことである。

人間はとても安住の地とはいいがたい場所で生活させてもらっていることになる。そうであるなら、運動のリズムが人間の生活リズムと大幅に異なっている、運動の仕組みをすべて理解できていなくても、災害となる運動を避けられなくても、それらを気にかけておいてしかるべきである。とりわけ、地震活動や火山噴火によって直接的な被害や犠牲をだし、日常的に土砂災害や河川災害を被っている国において、それらのほとんどない国と同じように対応しておいてよいはずがない。

2. 人間を作り出した地球の上で生きていく

まだ記憶に新しい1995年の兵庫県南部地震は神戸の街を直撃し、6000名を超える犠牲者を出した(第2表)。前夜に神戸の住人のほぼ全員が夢にも思わなかったことが、翌朝になってまったくの思い込みであったことを知ったのである。地震に限らず、火山災害、土砂災害、河川災害など、どのような災害に対しても、多くの方は「自分だけは特別で、そうした災害には遭遇しない」と勝手に思い込んでいる。しかし、どのように思い込もうと、地球のわずかな息づかいで人間は容易に生命の危険にさらされる。

人間の唯一の住みかである地球は、人間が作ったものではない。地球が長大な時間を使って人間を作り出し、一人の人間は極めてわずかな期間だけをその上でしか生きさせてもらえないのである。しかも、地球からみれば単なる自然現象でしかないことが災害となって襲いかかり、

目的を明確にした教育

地球の息づかいが荒い国で生きていかなければならない子ども達に対して、実際にはどのような教育がなされているのであろうか。

1. 小・中学校における「地球」の扱い

2002年度から実施されている学習指導要領(文部省, 1998a,b)によれば、大地や大気の運動を直接扱う理科の単元は小学校では次の3つである。

「気象の変化」・「流水の働き」(5年)

「土地のつくりと変化」(6年)

中学校では、第2分野(生物・地学分野)として

「大地の変化」・「天気とその変化」

がある。さらに第1分野(物理・化学分野)の「科学技術と人間」という項目との選択として

第2表 濃尾地震と兵庫県南部地震との比較

地震名	濃尾地震	兵庫県南部地震
発 生 年 月 日	1891年10月28日	1995年1月17日
発 生 時 間	午前6時38分	午前5時46分
震 央	岐阜県本巣郡根尾村	兵庫県淡路島
マグニチュード	8.0	7.2
被 害 数	おもに理科年表による	消防庁(2000年12月)
死 者	7,273名	6,432名
行方不明者	—	3名
負 傷 者	17,175名	43,792名
全 壊 家 屋	142,177棟	104,906棟
半 壊 家 屋	80,324棟	144,274棟

「自然と人間」という項目があり、自然環境を多面的・総合的に扱うようになっていく。

これらは、『ゆとり教育』のもとで内容の厳選が行われ、かなり大幅に項目が削減された結果である。地球表面付近での現象について、その基礎的な内容に限ったとしても、『生きていくための力』を身につけるのにこれで十分とは思えない印象をもつ。しかし、具体的な点については、時間数、内容、他項目・他分野・他教科との関係などいろいろなことを問題にしなければならぬので、ここでは触れない。

2. 理解させる目的

ここで注目したい点は、学習指導要領には個々の単元の学習目標を明示しているが、それらを取り上げられている目的が書かれていないことである。「目的意識をもつ実験・観察を行う」という学習目標が設定されていながら、学習目的が明示されていないのはどこか皮肉とさえ思える。具体的な目的を明示しだせば際限がなくなり、現実問題としてそれは不可能なことなのであろう。それらは学習目標から読み取れということであろうが、現場の教師にそうした意識はほとんどなく、設定された学習目標だけに目が向く結果となっている。

学習目標のなかで最もわかりやすいものは知識の獲得であり、それがすべての前提であるから大切な目標になることは間違いない。しかし、大学入試が終わればリセットボタンが押され、頭の中に何も残っていない大学生の姿をみれば、高校までにどのような知識を獲得してきたかがわかる。せつかく「日常生活に関連させて自然災害を扱う」（小学校）とか、「選択項目を設けて自然環境を多面的・総合的に扱う」（中学校）と設定されていながら、明確な目的を意識しないまま自然を理解させ、知識を獲得させているようであるから、実際には『生きていくための力』にならない教育を受けてきたことになる。とりあえずはわかりやすい目先の問題が解決すればよく、そこに目的を見出すことになるようである。入試合格という安全確保とそのさらに先に3～4倍も続く一生の安全確保のどちららを選ぶかは各人の自由である。しかし、少なくと

も学校教育の場では、目先の問題に右往左往するような教育をしているような時代ではなくなると考えるべきではなかろうか。

3. 自分の問題

地球の上で生きていくための力は、生命維持能力の中でもかなり基本的なものである。前提としての基礎知識の獲得も含めて、かなり目的意識的な教育がなされてもおかしくない。おそらく、学習指導要領はいろいろな問題をもちながらも、それなりのことを考慮して書かれているのであろう。しかし、たとえ学習指導要領がどのように書かれていようと、教育にあたるのは現場の教師である。現実とはかけ離れたロマンの世界で済ませるか、表面的な知識の獲得で済ませるか、真剣に「地球の上で生きていくために」という意識ですすめるか、どのような目的意識で教育していくかは、教師自身が生きていくために何が大切であると意識しているかを問うことになる。

教える側と同様に、教えられる側にもどれだけ自分の問題として捉えられるかが重要となる。どうしてもよい知識と捉えるか、自分が生きていく上で必要な知識と捉えるか、そこに分れ目がある。それだけ身近で切実な問題設定が求められるであろうし、そこに『理科離れ』問題や学習意欲の低下問題への解答の一つがあろう。例えば、平易に解説されたハザードマップ（災害予測図）なら、義務教育を修了した者であれば誰でも理解できて当然となるような教育がなされていなければならない。それを理解しておかなければ大変なことになると自覚させる教育内容が求められ、校下に1枚は何らかのハザードマップが用意されているような教育環境も求められる。

4. 避けて通れない課題

ここでは災害問題にあたることを中心に述べてきたが、環境問題や資源問題も子ども達が地球の上で生きていくためには避けて通れない具体的な重要課題である。難しい問題でも子どもの認識段階に応じて積極的に明確な目的を持って教育されるべきである。それは大人の責任で

あり、決して学校にだけ押しつけられるものではない。やはり、未来へ向けて「生きていくために何をしておかなければならないか」という共通認識が社会全体に求められるはずである。

もちろん、学校での教育が果たす役割も大きく、新たに設けられた『総合的学習の時間』などはそのために有効に使える時間となろう。ただし、それを教える教師にとっては、既存の教科では表面化しなかった教師の総合的能力がストレートに問われることになる。その中に教師自身もつ『生きていくための力』が含まれることは言うまでもない。

お わ り に

『生きていくための力』は学習指導要領でいう『生きる力』とは次元の異なる課題である。もっと直接的な課題であろう。その中で何が基礎的で重要であるかという選択はそれぞれの分野・立場から議論されていくものであろう。ここで主張することも絶対的に捉えて、縄張り根性的に主張するつもりはない。ただ、『生きていくための力』として何を教育していかなければならないかは真剣に検討されるべきであり、各分野から積極的に発言すべきである。国をあげて子どもたちをペット扱いするようなことだけは止めるべきである。

文 献

- 文部省(1998a) 小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局, 105P.
文部省(1998b) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局, 119P.
村松郁栄・松田時彦・岡田篤正(2002) 濃尾地震と根尾谷断層帯. 古今書院, 340P.